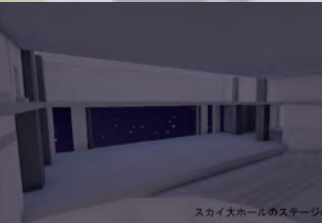
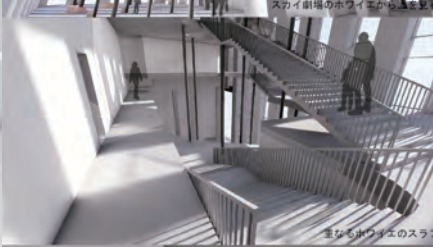
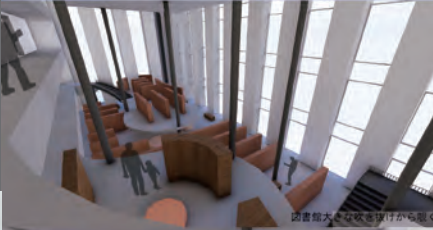


東京都心の空間認識のための
多様なスケール体験による今後の高層建築物のふるまい

ー 池袋の都心空間とサンシャイン 60 の「アップサイクル」ー



目的と背景

本研究では東京都心における高層建築物について考察する。人口減少が予想される中で、再開発によって高層建築物が次々と建設されることに矛盾を感じる。そこで、高層建築物の「アップサイクル」について提案を行う。「アップサイクル」が都心の豊かさの助けになることを目指したい。

高層建築物と東京らしさ

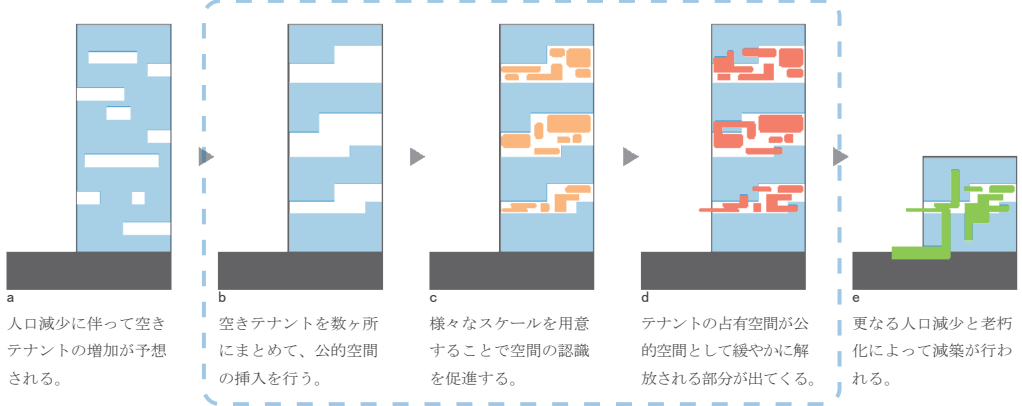
高層建築物が次々に建設されることに疑問はあるが、既存の高層建築物は東京都心らしさをの一端を担っている。地下道や巨大建築物内で活動が完結することが多くマチに対する空間認識が阻害されている。東京都心の地下道や高層建築物は快適さを提供する一方で、認識を困難にし、マチのイメージが間接的になりがちである。

コンセプト

サンシャイン 60 の「アップサイクル」により東京都心の一つである池袋の都心空間を認識する。

既存高層建築物であるサンシャイン 60 が社会の縮小に伴って活用されない空間が増える未来を想像する。そこでサンシャイン 60 に公共空間を挿入する「アップサイクル」を行う。巨大なスケール と中途半端なヒューマンスケールによるチグハグなスケールを持つ高層建築物を多様なスケールの横断と体験を生み出す設計によって、都心の空間認識を促す。

ダイアグラム



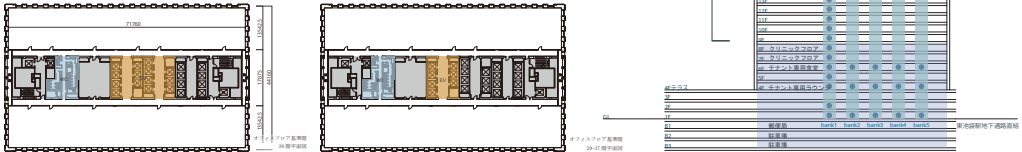
本設計では、b～d の段階を提案し、c の段階を主として考える。

敷地

サンシャイン 60

サンシャイン 60 はオフィスビルである。平面のプランは非常にシンプルでセンターコアの高層建築物である。センターコアの両側には広い無柱空間が広がっており、オフィスを借りている企業によって自由なレイアウトが可能である。

オフィスフロアでは、2700mm の天井高と広大な水平空間によってスケールが乖離し、高層建築物としての巨大さも加わることで空間認識が困難になっている。内部では高層建築物にいる感覚が薄れ、外部からも中の活動が想像しにくい。これを改善するため、スケールの相対性を生み出し、都心の巨大なスケールとヒューマンスケールを緩やかにつなぐことで、空間認識を助けたいと考える。



設計手法①

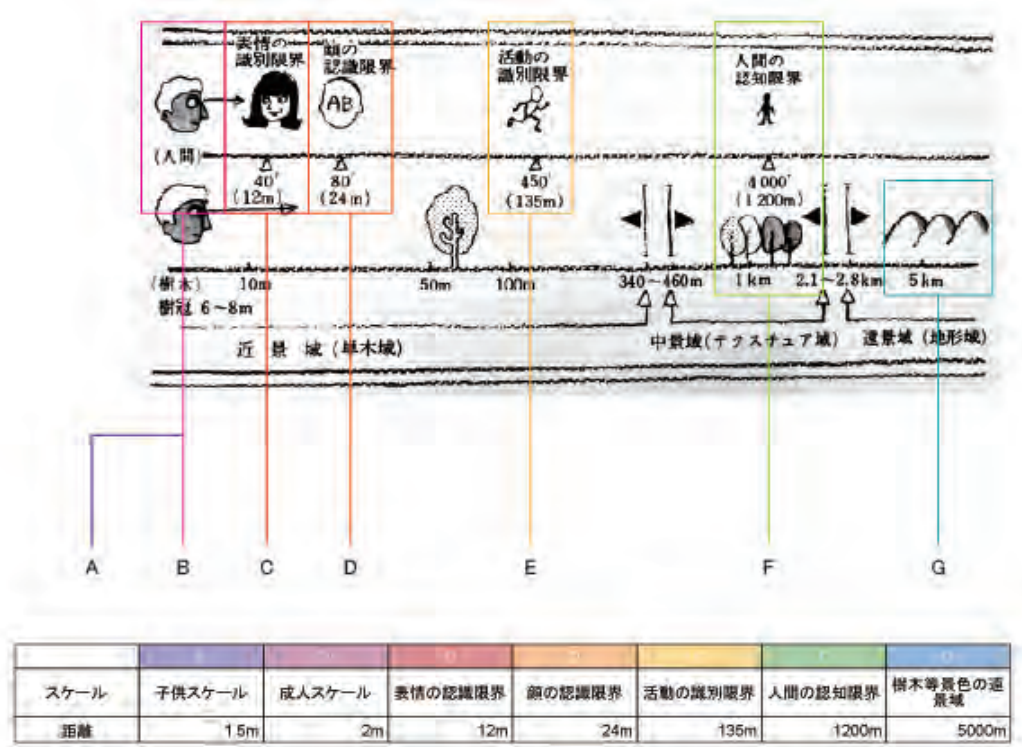
占有空間であるオフィスフロアに公共空間を挿入する。

高層建築物の均質空間 はかねてよりの問題であるが、公共空間の挿入をトリガーに豊かなオフィス空間が提案できるのではないだろうか。既存のスラブを部分的に解体し、既存建築からは独立した新築で軽やかな S 造のスラブを挿入する。また、外壁の構造を一部解体し、内部に構造体を設置する。それにより、施工時に必要な空間を生み出しつつ、既存の階層を横断する大きな窓のようなガラス面を考えた。

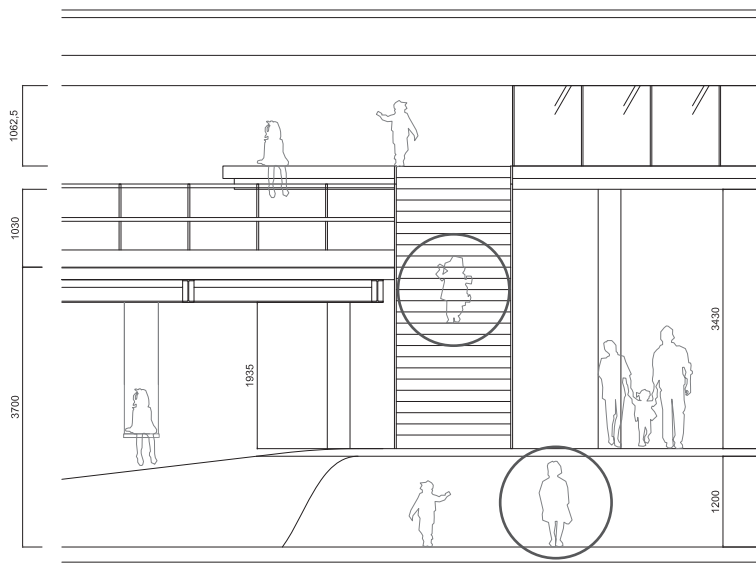
設計手法②

相対的なスケールを用いることによる空間認識の補助と促進。

巨大なスケールとヒューマンスケールの間にあるスケールをつくることで様々なスケールを比較でき、空間を認識しやすくなる。相対的なスケールを意識して設計を行うために、篠原修による「新体系土木工学 59」をもとにオリジナルスケールを提案した。A～G の七段階のスケールに分けることでスケールの相対性を高めた。ヒューマンスケールとして A 子供スケールと B 成人スケールを考えた。そして、C からは図を参考にした。C は表情、D は顔、E は活動、F は人間を認識できる距離をそれぞれのスケール基準とした。最後に G は風景として遠景域も一つのスケール指標として示した。



サンシャインシティ周辺写真



A 子供スケール

サンシャインスカイパーク

池袋にある公園は子供たちが走り回るような空間は少ない。そこで、雨の日であっても都心でも子供たちがあそびまわれる場を提案する。無料の水族館エリアや工作エリアなど、体を動かす以外の遊び方もできるような空間を考えた。都心の景色を眺めながら、高い場所や低い場所など子供たちならではの豊かなスケールを体験できる。

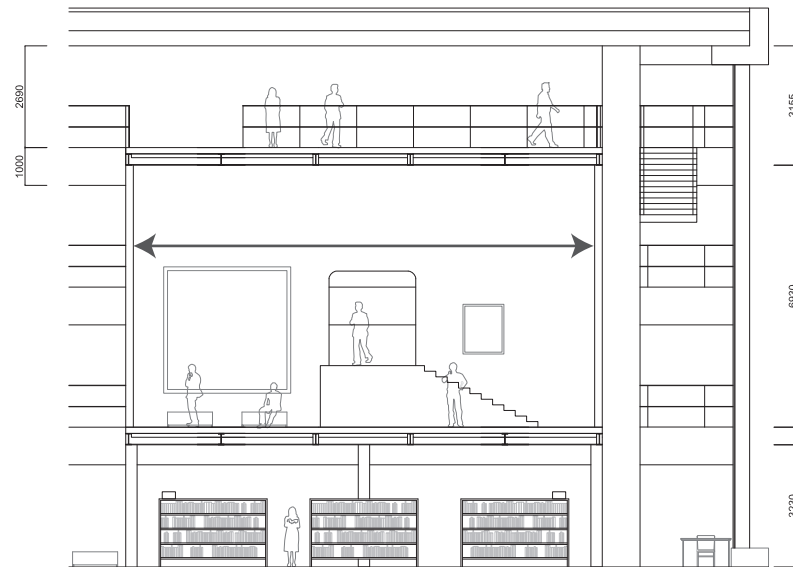
B 成人スケール

サンシャインスカイ図書館

豊島区中央図書館の分館として提案する。有料ゾーンを用意し、池袋らしさであるサブカルチャーの一つである、マンガやアニメに触れることができる空間を考えた。大きな吹き抜けで上下を繋ぐことによって、高層建築の巨大空間を縦横無尽に動き、自由に本や漫画、景色に触れることができる。また、カフェを通じて緩やかにオフィス空間とつながる。

E 活動の識別限界スケール サンシャインスカイ水族館

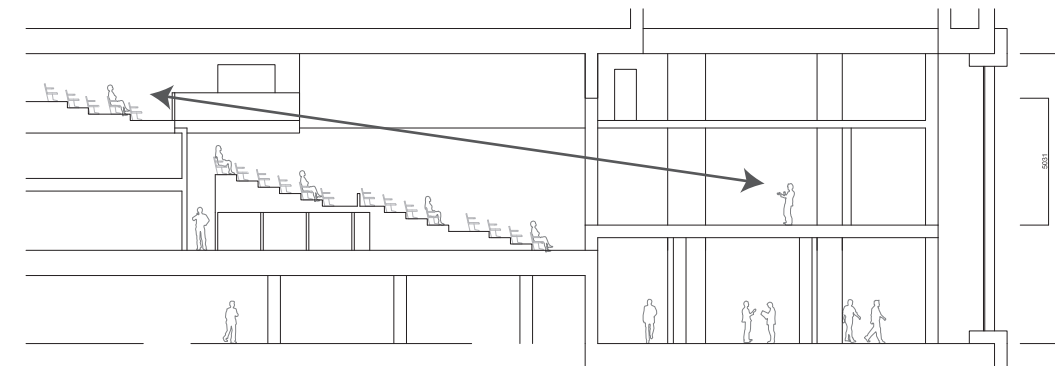
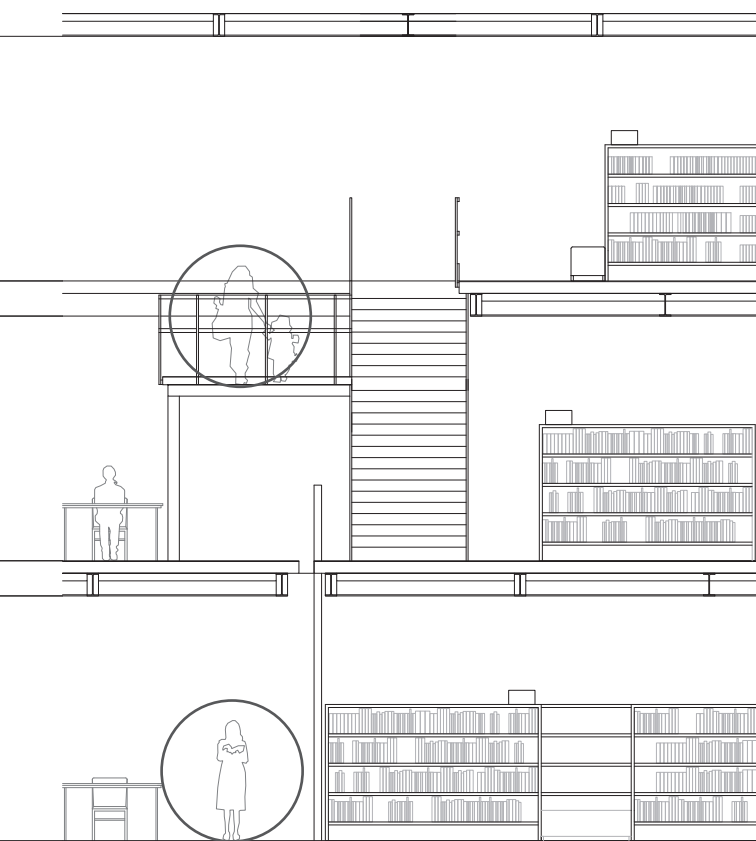
サンシャイン水族館の分館として提案する。サンシャイン水族館では特別展示を毎年行っている。そこで、特別展をさらに広いスペースで行えるような分館として、水族館を提案する。活動の識別限界の距離であるおよそ 135m の距離であればオフィスで働く人が離れた所にあるサンシャイン水族館に思いを馳せることができる。そして、サンシャインシティというマチにいることを認識し、更には池袋というマチで働いている事を体感できる。



C 表情の認識限界スケール

サンシャインスカイ美術館

池袋には大きな美術館はない。そこで、マンガやアニメなどサブカルチャーから現代美術まで広く扱う豊島区を代表する美術館を提案する。また、無料ゾーンをつくることで図書館と緩やかにつながるギャラリーでもあり、閲覧エリアでもある空間を用意した。展示室を巡り様々なスケールを横断することで、巨大な都心の高層建築物内での空間認識を促す。



D 顔の認識限界スケール サンシャインスカイ劇場

アート・カルチャーのハブとなるように周辺の劇場とは異なる劇場を2つ提案する。ステージの奥が解放されることで都心の街並みが広がる大劇場と、劇場以外の用途としても気軽に使用出来るフラットな小劇場を考えた。また、劇場以外にもホワイエの大きな吹抜に顔の認識限界スケールを反映させ、重なるスラブによって細かなスケールに分割している。

F 人間の認知限界スケール 大マド

施工用の孔として開けた部分を、大きな窓とした。巨大な高層建築物に窓がつくことで屋外からの印象を変化させる。また、光や影などによってマドの奥での活動を想像させる。

G 間の認知限界スケール サンシャイン60

サンシャイン60の「アップサイクル」によって、池袋のシンボルに変化がおり都心の中で高層建築物の新しいあり方を示す。

